



平和のはな つうしん

《第4号》

2016年4月27日
コープさが生協
平和のはなネットワーク
TEL 0952-31-3977



佐賀の被爆者の体験を聴く会（第1回） を開催しました。



■4月25日（月）10時～12時 みやき町働く婦人の家にて、佐賀県被団協鳥栖・三養基地区の被爆者5名の方に参加いただき、それぞれの当時とその後の体験をお話いただきました。

当日はNHK、STS、佐賀新聞の取材があり、風化していく戦争被爆体験の継承という意味で注目されました。被爆者のそれぞれの体験が想像を超えて心を打ち涙なしには聞けませんでした。

参加者一人一人が、戦争と核爆弾の悲惨さをあらためて語り伝えあう意味をかみしめる機会となったと思います。

平和のはなネットワーク世話人会では今回のお話の内容を記録して、冊子にしていく予定です。また、佐賀の別の地区の被爆者にも参加いただけるよう次の体験を聴く会も計画していきます。

【参加者のアンケートより】（抜粋）

「被爆者の方がおられても聞きづらいこともありますが、話して頂いてとてもよかったです。その時のことをありありと話して頂いて、やはり大変な思いをされたのだということを感じました。そのことの結論が戦争は良くないと言われたことがとても印象的でした。」

「今日出席して本当に良かったです。戦後70年今にも引きずっていられて大変でしょう。私たちも何も知らなさすぎていました。原爆の恐ろしさ。今になって原爆が落ちて戦争が早く終わったとも言っています。あんまりですよ。ありがとうございました。伝えていこうと思いました。」

被爆者の体験を聴く会

コープさが 平和のはなネットワーク



← 3歳で長崎で被爆された堤さん（左）、広島で13歳の時被爆された埋金さん（右）



↑ 4歳で長崎で被爆された田中さん（左）、16歳で長崎で被爆された西村さん（中）、17歳で長崎で被爆された森山さん（右）



組合員25名と被爆者5名、マスコミ4名が参加しました



NHK、STS、佐賀新聞の取材陣

被爆者 苦難の71年語る

戦争体験 次代につなぐ

生協組合員ら座談会企画

県内
太平洋戦争終戦から71年。戦争体験者が減り、関係団体の高齢化が進む中、戦争の記憶を風化させず次代に語り継ぐと新たな動きが出ている。コープさが生協の平和活動グループ「平和のはなネットワーク」

ク」は戦後70年を機に昨年2月に発足。直塚家保代表(48)は「戦争を経験していない私たちが知らないままにして、次の世代を育てていくことはできない。語り継ぐのが戦争による被爆を唯一経験した日本人の役目」と話す。

4月25日午前、みやき町勸婦人の家に会員ら約30人が集まった。目的は県内在住の被爆者の体験談を聞くこと。会発足後、県原爆被害者団体協議会と調整を進め、実現にこぎ着けた。

第1回のこの日は、県被爆協の田中徹会長(75)と基山町115人が講師を務めた。車座で膝をつき合わせた座談会形式で、被爆時の情景や長年病魔と闘い続けてきた体験などが語られた。参加者は「爆発したのが原爆という情

報はすべて伝わったのか」「被爆者健康手帳の交付で苦労したこと」など積極的に質問し、熱心にメモを取って口を開いた人も。堤洋子さん

ネットワークの活動に賛同し、今回初めて語り部として

(74)「みやき町」は当時3歳で、佐世保市で空襲に遭った後、父方の親類を頼って避難した長崎市の土井首地区で被爆した。「母は私を抱いてお縁にいた。ヒカッと光がして誰かが『毛金の中に逃げろ』と叫んだ。みんな一斉に入り込もうとしていたら、爆風でガラスが割れて家がぐらぐら揺れた。家を出て、山陰でひとかたまりになって難を逃れた」と振り返った。

「就職などのときに、原爆を受けているから体が弱いだろうという偏見があった」と被爆の事実が社会生活にも影響を与え続けることに触れ、「今まで被爆者という言葉を伏せてきたし、忘れてしまいたい」と心情を吐露した。

田中会長は「被爆協でも世代交代を進める必要があるが、国が被爆2、3世の認定を進めないため、同世代にはメリットが少なく、活動が思うように活発化しない。そんな中、40、50代の方が中心となった取り組みが新しく始まるのは頼もしい」と歓迎する。直塚代表は「戦争が起きたときに庶民にどういった事態が降りかかるのか、生の声を聞くことができた。今後も県内各地で開催したい」と述べた。会は生協組合員以外も参加できる。問い合わせは事務局、電話0952(31)3977。

(大橋 諒)



被爆者の体験を聴く会
プさが 平和のはなネットワーク

長崎や広島での被爆体験を語る被爆協の会員たち(中央)



【参加者のアンケートより】

●戦後12年間も被爆者に対する国の支援がなかったことを初めて知りました。誰の遺体が確認することも記録されることもなく、腐敗が始まった遺体を次々と運んだ方。被爆で負傷して病院へ行って患者であふれ十分な治療も受けられず、激しい痛みで1か月も悩み、その後も入退院を繰り返された方。体験されたご本人からお話を聞くことで、現実に入ったことであると実感しました。

放射線の影響は70年経っても今なお続きがんなどの病氣と闘っていること。修学旅行生が被爆体験の語り部に対して暴言を吐いたことに深く傷ついたこと。核兵器がどんなに悲惨な結果をもたらすのかを今世、後世に伝えることの大切さと、どう伝え継ぐのかを考えさせられました。これから体験を聴く会を行ってくださることを望みます。

●被爆者の話を聞こうと部屋に入ると窓側からの光に照らされて広島・長崎の原爆資料の写真が展示されており、目を引きました。一枚一枚見ていった中で、よくマスコミで見かける一枚、幼き妹の亡骸を背負いながらたたずむ少年の表情・空虚感・無音の世界に突如として迷い込んだような表情なんとも言えない一枚。次に一人の人間であったであろう黒焦げの写真。尊厳ある命ある我々と同様の知的生命体が黒く焦げ木炭化し、知性を有し、見・聴き・話し・考え・表現をするような痕跡が失われ、全く感じられない一本の木片の燃えかすのような、一体こんなことがあって良いわけではない。やはり罪ではないか。

●被爆したことを他人に隠すこともなく、結婚もできないかもしれないと考えていなかったお一人と、被爆したことが恐ろしく口にしたくない、話したことがないと考えたお一人と、すべてご自身の体験たれたこと、その後の生き方が相反するお二人の話でした。当時のご自身ご家族のこと、その後今まで抱えてきた数々の内心など、お二人の違いの差があまりにもかけ離れていることに正直まごついてしまいました。地名が出てきます。それがどこか?爆心地や地形の地図があれば、話が理解しやすかったので、次回からは地図が必要と痛感。